

令和5年度茅ヶ崎市環境審議会 第2回自然環境分科会（WEB会議）会議要旨

日 時： 令和5年8月10日（木）9時30分から12時まで
場 所： 茅ヶ崎市役所分庁舎5階 特別会議室
出席委員： 篠田委員（WEB会議により出席）園原委員、田中委員、藤吉委員、山口委員
欠席委員： 鈴木委員
出席職員： 【環境政策課】柳下課長、森課長補佐、木村主査
【景観みどり課】戸井田課長補佐

1 自然環境団体ヒアリング

- ・政策目標1の施策の実施状況を評価するにあたり参考とするため、市内で活動を行っている団体に出席いただきヒアリングを行った。
- ・ヒアリング対象は「茅ヶ崎市環境基本計画年次報告書（令和5年度版）」の作成にあたり、「令和4年度の環境に関する活動及び自然環境の状況等報告書」を御提出いただいた9団体とした。
- ・ヒアリングは次の（1）から（9）の順に行い、冒頭で各団体の自己紹介をしていただき、その後質疑応答を行った（○=委員、■=団体、△=事務局）。

（出席団体）

- （1）小出川に親しむ会（丹沢富雄 氏）
- （2）柳谷の自然に学ぶ会（野田晴美 氏）
- （3）駒寄川水と緑と風の会（池田尚子 氏）
- （4）相模川の河畔林を育てる会（江口恒夫 氏）
- （5）清水谷を愛する会（村中恵子 氏）
- （6）行谷ツリフネソウ友の会（村中恵子 氏）
- （7）三翠会（平田 稔 氏）
- （8）生物多様性研究会（岸しげみ 氏）
- （9）NPO法人 ゆい（荒井三七雄 氏）

（1）小出川に親しむ会（丹沢富雄 氏）

【自己紹介】

発足は1987年で今年で36年目になる。小出川は茅ヶ崎市の西部を流れる全長12キロ程度の小さな川で、藤沢から流れてきて相模川に注いでいる。市内では貴重な水辺であり、緑の空間である。こうした環境を次世代に残すため、川に親しみながら、様々な人が自分の関心に沿って参加できるように、散策路の手入れや田んぼでの古代米の栽培など、多彩な活動を行っている。地域との関りも重視しており、昨日は鶴嶺公民館で、夏休みの小学生を対象にした水質調査の体

験を行った。一昨年はUDCCという団体と「小出川フットパス構想」について、パンフレットを作成した。今後は、小出川フットパス構想を具体化するような提案ができればよいと思っている。

【質疑応答】

○鶴嶺公民館で実施した水質調査の結果はどうであったか。

■水質調査体験はCODのみの測定で、普段と比べるとあまりきれいではないという結果だった。前日の雨の影響と考えられ、そうしたことを小学生と共有した。

○団体の活動で様々な調査をしているが、調査結果を一般に公表しているのか。

■年に2、3回発行している「小出川通信」という会報に掲載している。会報は市役所や地域で配布している。以前に発行した15年誌、30年誌にも、植物や鳥、水質、大気などのデータを掲載した。専門家ではないが、偉大なる素人を自負している。

○報告書の「市民活動団体から見た自然環境の状況」に、ナガエツルノゲイトウに関する記述がある。ナガエツルノゲイトウは駆除が難しいが、小出川で増えているのか。

■7、8年前から気になっているが、ここ数年で爆発的に増えたという状況ではない。河川管理者の神奈川県藤沢土木事務所とは意見交換をしていて、今のところは注視している。

○神奈川県の相模川水系沿いに分布が広がって定着してしまっているのが茅ヶ崎市だけの問題ではないが、琵琶湖などでは大変な問題になっているので、これからも継続的に観察し、県と情報共有していただきたい。

(2) 柳谷の自然に学ぶ会（野田晴美 氏）

【自己紹介】

以前、柳谷にスポーツ公園をつくるという神奈川県の計画があり、それを何とか自然を残すかたちにできないかという願いを持って設立した。最終的に半分は都市公園、半分は里山が残された。その残された里山をフィールドに活動している。1か月に1回定例会を実施している。会報「緑のまち」は年3回の発行である。里山公園内の「畑の村」の湿地の手入れをして、休耕田のような状態にしつつ、子どもが水生生物の観察ができるような場所となるよう保全活動を行っている。また、保全区域内の池が乾燥化しているので、湿地化するような保全活動を行っている。生きもの調査や水質調査を行い、その調査結果は会報で公表している。イベントでは、環境政策課主催の「里山はっけん隊！」に協力している。

【質疑応答】

○去年のヒアリングでは、バーチャルのイベントが多く、早く対面で実施したいという話があったが、その後、対面での実施ができるようになったのか。

■観察会に関しては、バーチャルではなく、マスク着用で対面で行っていた。里山はっけん隊！は、令和3年度はバーチャルでの開催だったが、令和4年度からは対面での実施に戻した。以前は一日の実施だが、感染対策として半日のプログラムに変更している。

○報告書の「市民活動団体から見た自然環境の状況」に、生物多様性の兆しが見えてきている

とあるが、定量的にはどのように把握しているのか。

■定量的というのは分からないが、観察会や保全活動をするなかで、以前見られなかった生きものが見られるようになったということはある。

○調査結果は会報で公表されているのか。

■アカガエルの卵塊数や鳥類などは会報で公表しているが、希少性の高いものなど、一般に公表しない方がよいと思われるものについては、非公開としている。

○保全作業の内容としては草刈りが中心なのか。

■草刈りのほか、湿地に堆積した土を掃き出すなどの作業も行っている。湿地の面積が広がってきたのでその周りの整備も始めている。

○草刈りをしないと、植物が茂りすぎて枯草などが堆積し乾燥化してしまうのか。

■そうではなくて、水を堰で溜めながら流すようにするとこれほど乾燥化はしないが、畦を作って水を溜めるということができていないので乾燥化が進んでいると思っている。上部の湿地でうまく保水ができるように、保全部会で検討を始めている。

○里山公園は県立公園だが、調査や保全活動で県と連携している部分もあるのか。

■5年に1度調査を行い、それに基づき保全計画を見直すというのが県の当初の計画であったが、予算がなくて調査ができていない。里山公園には保全部会というのがあって、神奈川県藤沢土木事務所も交え、湿地を今後どうしていこうかということについても、みんなで話し合っただけで検討している。

○継続した調査は重要なので、今後も引き続き活動を続けてほしい。

(3) 駒寄川水と緑と風の会 (池田尚子 氏)

【自己紹介】

30年以上前、地域の公民館で、全10回ほどの自然の連続講座があり、その受講者有志で立ち上げた団体である。地域密着で会員は近所の方が多い。茅ヶ崎の北部に位置する駒寄川は、相模川水系で、清水谷を主な水源として、小出川の合流地点まで4キロほどの小河川である。先ほどナガエツルノゲイトウの話が出たが、我々の活動エリアである香川駅付近から上流には入ってきていない。駒寄川は、昨年新たに開館した茅ヶ崎市博物館の敷地内を流れており、今年の4月から、そこで水生生物の観察を行っている。アユやヨシノボリ、ドジョウなど、新しいものの発見があった。

当会ではカントウタンポポの調査を20年ぐらい行っており、カントウタンポポの群落3か所の株数や帯状化現象が見られるタンポポの数、その他植物について記録しているが、5、6年前から資材置き場が増えて、カントウタンポポの群落の面積が減っている。「市民活動団体から見た自然環境の状況」のところに書いたが、今年の春は、ノアザミやワレモコウ、クサボケ、ツリガネニンジン、ウラシマソウなどの指標種があった豊かな草地環境だった土手が削られてしまった。市道に関する開発だったので、自然環境評価調査の調査結果を確認して工事が行われれば、指標種がまったくなくなってしまうことはなかったと考えられる。自然環境評価調査の結果が生

かされているとは思えない。北部には自然のままの土手がまだ残っていて、指標種、希少種が細々とある。今年度から、自然環境評価調査が始まるが、今回から緑のまちづくり基金が活用できるように条例も変更して始まっている。ぜひ自然環境評価調査が生かされるような保全管理をしていただきたい。年次報告書では、景観みどり課が指標種の移植作業を行ったという記載があるがルールがあるように思えない。自然環境評価調査が終わったら、緑化ガイドラインを作成することなので、何を移植するのか、移植後どうするのか、公表をどうするかなどのルールを盛り込んで、早めに策定してほしい。

【質疑応答】

- 団体が活動している場所で工事があり、希少種などがなくなってしまったということだが、前もって分かれば移植などができたのか。
- 情報が先に入れば移植できるが、ある日突然工事が始まった。希少種などがあるエリアは、自然環境評価調査の記録に残っているはずなのだが、情報共有がされていない。
- 先ほど、緑のまちづくり基金を活用するという話が出たが、どのように活用するのか。
- 緑のまちづくり基金は、もともと緑地の保全のために行政が積み立てをしている基金で、それを自然環境評価調査に使えるようになったという話で、我々団体が使えるようになったという話ではない。

(4) 相模川の河畔林を育てる会 (江口恒夫 氏)

【自己紹介】

茅ヶ崎市内の特に重要な自然環境の一つである、相模川下流域左岸の平太夫新田において、野外観察会も含め、会員9名で年間10回程度の活動している。平成17年に、国土交通省により平太夫新田エリアの750本もの水害防備保安林の伐採を行う築堤計画が公表され、それに伴い、横浜国立大学の藤原先生による河川環境に関する講座が開催され、最終的に国交省が保安林伐採の代替措置として、茅ヶ崎市に本エリアの占有許可を与え、本会の前身となる環境市民会議ちがさきエコワーク等の市民団体連合が、100年の森をスローガンとした自然環境保全再生の活動を開始し、継続して行っているところである。活動内容としては、希少な植物の保全再生、地元企業との協働活動の支援、外来種の駆除を行っている。希少な植物については、オドリコソウ、トモエソウの保全を行っており成果が確認されている。エノキ、ケヤキ、タブノキ、ヤマグラ、マユミ等の育成エリアの拡大も確認されている。地元企業との協働については、企業の社会貢献活動として実施している良好な植物遷移管理を継続的に支援している。また、アレチウリ、オオブタクサ、セイタカアワダチソウ等の外来種の駆除を行い、茅ヶ崎市みどりの基本計画 生物多様性ちがさき戦略の推進に貢献している。一昨年の11月に、当会の活動エリアの隣接地に野球練習場が設置され、保全活動中の事故等が懸念され、今後の保全活動の継続が危ぶまれている。また、除草剤の空き容器等も確認され、茅ヶ崎市の「平太夫新田〈相模川河川敷内市占用地〉保全管理の考え方」に基づく生物多様性に配慮した保全管理を進めるうえで大きな問題となっている。環境基本計画の確実な遂行のため、環境政策課及び環境審議会からの指導助言をお願い

いしたい。

【質疑応答】

○100年の森を目指した活動というのは具体的にはどのようなものか。森にどのような役割を持たせるとか、こうした樹種を選定するといったことは決まっているのか。

■具体的には決まっていないが、生物多様性に十分配慮した森づくりということで、外来種を排除し、既存の在来種を守っていくということである。

○活動報告の保全活動として、常緑樹等の選定、実生木の伐採ということが書かれているが、その識別や判定はどのようにしているのか。鳥のふんで散布されるトウネズミモチや、河畔林であればオニグルミなどが流されて相当数定着していると思われるが、どのように判断しているのか。

■茅ヶ崎市では、生物多様性に配慮した緑化基準がないので、団体として判断して進めている。市で基準を早く作ってほしい。

○潜在自然植生に配慮するという考え方はあるのか。

■潜在自然植生を考えたらうえて、それに敵対する外来種については駆除していく。

■今日はオドリコソウの写真を用意したので見ていただきたい。これは茅ヶ崎市内では平太夫新田でしか見られない在来種で、阿波踊りなどの踊り子さんが踊っているような、面白い私たちの花が咲く。6月から8月にかけて花が見られるので、ぜひ一度来ていただきたい。

(5) 清水谷を愛する会（村中恵子 氏）

【自己紹介】

市と協定を結び、清水谷特別緑地保全地区で保全活動を行っている。毎週火曜に保全活動を行っており、昨年は49回実施し、のべ331人の参加があった。保全活動は、倒木、枯れ枝等の処理、林床の下草刈り、常緑樹の伐採、竹林の間引き、散策路や水路の補修、葦原の維持、外来植物の除去など、多岐にわたる。保全活動の際は、生きものの観察もしており、作業日報として毎回市の担当部署3課に報告している。年4回の水質調査、月1回の定例観察会のほか、昨年は、円蔵中学校、鶴が台小学校の総合学習の支援を行い、自然との触れ合いの楽しさを味わってもらった。昨年は、会員増加も視野に入れ、一般参加を呼びかけ、林の下草刈りや常緑広葉樹の伐採等を行う、保全作業のイベントを3回実施した。楽しいと言ってくれる人もおり、毎回参加してくれる人もいてこれからも続ける予定である。

昨年度から続いていた保全管理計画の改正は、やっと終わったようだが、完成品はまだ出てきていない。今年度から森林環境譲与税を使って、ナラ枯れの伐採が行われるようになったが、林床の希少種の保護に苦労している。伐採木を持ち出せない場所もあり、野積した被害木から、カシノナガキクイムシが新たに繁殖しないか心配である。落葉広葉樹の育て方も検討している。今年から、年3回発行している「清水谷通信」を堤東地区の回覧板で回してくださることになり、少しは理解をしてもらえるのではないかと喜んでいる。

隣地との摩擦や水量確保のために、畑と接する林縁部は幅5メートルから10メートルぐらい

の土地の借り上げが欲しい。中央池は排水溝のかさ上げで、干上がりを防いでいたが、それも限界に近づき、先週は一滴もない状態になった。会では、自費で測量図を作り、今後の検討材料にしていこうと思っている。市は生物多様性を考えた中央池の将来像をしっかりと示し、改善のための予算を取ってもらいたい。

【質疑応答】

○夜の観察会はしていないのか。ヘイケボタルなど特徴的な生きものや、クツワムシやマツムシなどの草地を代表する鳴く虫などは住んでいるのか。

■夜の観察会は実施していない。会員は市内の遠くから来ている人も多いので、夜に活動するというのは難しい。ホタルなど、特別に珍しいという生きものは確認していない。

○ナラ枯れの被害の拡大が心配という話があったが、伐採木をバイオマス発電所で処理すれば一石二鳥なのではないか。

■できるだけそうしたいが、地形的に車が入るのが難しいので、伐採した樹木はそこに置いていくというかたちになっている。伐採木をどこに置くのかも重要で、先日、景観みどり課と公園緑地課の職員と確認しながら回った。業者が決まった段階でまた確認しながら、打ち合わせをしていく

■横浜や横須賀では、自然環境を守る部署があって、一括してきちんと対応されているという印象があるが、茅ヶ崎市では、環境基本計画を所管しているのが環境政策課で、実際に自然環境の対応をしているのが景観みどり課、お金がついているのが公園緑地課で、3課がいつも話し合いをしないと物事が進まないという状況になっている。自分が環境審議会の委員だったころは、環境政策課がきちんとやっていたが、それがなくなってしまったので、できたらそういうふうな方向性になるように、環境審議会でも願っていただきたい。

(6) ツリフネソウ友の会（村中恵子 氏）

【自己紹介】

環境基本計画2011年版で、生物多様性が高いコア地域とされていた行谷地区の細流がある場所で活動してきた。15年近く前に、この地域が県の遊水地の候補地となり、我々はこの場所を守ってほしいと市にお願いしたが、茅ヶ崎市は、この場所に遊水地を作って欲しいという名乗りを上げ、遊水地を上部利用することで、市民が納得するような湿地環境を残すと明言していた。細流のところは、ツリフネソウとかがたくさん咲くいい場所なので、有志が保全活動をしていたが、昨年11月に神奈川県遊水地設置工事前段階ということでブルドーザーが入り、湿地環境に生息していた在来植物等はすべてなぎ倒されるという状況になった。その際、茅ヶ崎市が神奈川県に上部利用はしないという回答をしていたということが、初めてわかった。今後、保全活動はできないので、見守っていくしかないと考えているが、市民が協力して実施している自然環境評価事業の結果が、茅ヶ崎市の施策として有効に生かされないことは納得できないし、この場所の貴重な植物を移植することに関しても何の情報もない。自然環境の保全は、市民の力なしにはできないと考えているので、その方法をきちっとルール化して確立して欲しい。

【質疑応答】

○今後、その場所が具体的にどうなっていくのか、何か情報はるか。

■2メートルぐらい掘って遊水地にするだけである。公園的なかたちにはならない。茅ヶ崎市が上部利用をするのであれば、茅ヶ崎市が責任をもってお金を出して管理することになったと思うが、茅ヶ崎市が上部利用をしないので、県が遊水地として整備した後も管理をしていくことになると思う。2メートルくらい掘った状況の湿地のまま、それが残されてうまくいくのかわからない。土や希少種の移植も行われているようだが、その結果がどうなるかも不明である。湿地の下をそのまま土にするのか、コンクリートで覆ってしまうのか、それも決まっていない状況である。

○そうした工事が行われているのであれば、数年前から県や市のやりとりがあったと思われるがそうした情報は団体には伝わっていなかったのか。

■この場所が遊水地に決まるといえるときには、いろいろな交渉もしたし、設計ができた段階でも県に話を聞きに行ったりしている。遅れていた工事が、昨年11月に急に始まったという状況である。今後、盛土があるところの土を移動したり、小出川の拡幅工事があって、今年中に土地の買収が終わって、また来年度から工事が始まると聞いている。

○会として、今ある希少な生きものを移植することはできるか。

■自分たちは、そういうことはできない状況だと思っている。

○上部利用するしないに関わらず、そもそもコア地域であるならば、工事はいけないという話はなかったのか。

■自分たちは工事をしないでほしいとお願いしたが、市は上部利用をして湿地環境を元に戻すので大丈夫だと言って市民を納得させたと思う。自分たちはずっと反対してきた。

○まずコア地域であることを解除をして、それから工事をするというのが手順ではないのか。

△(事務局) 今回の分科会は、団体へのヒアリングなので、行政への質問には、次回第3回分科会でお答えしたい。

(7) 三翠会 (平田 稔 氏)

【自己紹介】

2000年の4月に発足して今年で23年目になる。三翠会という名前には、市内を流れる、相模川、小出川、千ノ川の三つの川を緑豊かな川にといい、初代代表の森上さんの願いが込められている。三翠会では、タゲリなどの渡り鳥の生息地である田んぼを守るためのタゲリ米プロジェクトや、魚道やビオトープの設置など、「田んぼに命のにぎわいを」をスローガンに、水辺に暮らす生きものの環境を守る活動を行っている。ホームページなどで情報発信を行っており、学生さんや農林水産省の方などに来ていただくこともある。最近では東京から参加する小学生もいる。生態系への影響ということでは、土手の草の丸刈りの影響を危惧している。これについては、藤沢土木事務所に苦情を入れたところ、いまのところ止まっている状況である。先ほども話に出ていた、ナガエツルノゲイトウについては、我々も非常に気にして注視している。今宿

の休耕田では水が入っていないにも関わらず、ナガエツルノゲイトウが出てきている。水陸両用の非常にやっかいな種であるようである。

【質疑応答】

○象徴的な生き物としてたタゲリという鳥に着目されてるが、タゲリの飛来数に変化はあるのか。

■近年はほとんど見かけなくなった。高速道路の橋げたを作ってる頃は、まだ見られたが、圏央道のジャンクションが出来上がって、夜も非常に明るくなったので、来なくなったのではないかと。そうは言っても、多少の飛来はあり、従来のようにワンシーズンずっと来ることはないが、ちょっと休憩しているようである。タゲリがいつでも戻ってこられるようにという思いも込めて、日々田んぼを守る活動をしている。タゲリ以外にも、冬場は40種以上の鳥が見られる。

○冬の田んぼは乾田化させるのが一般的だが、野鳥のために、冬でも冠水させて湿地的な水田にするということはあるのか。

■数年前に実験的に冬水田んぼのようなことをしたことはあるが、人の問題や予算の問題で継続的な実施には至らなかった。ただ、田んぼに隣接して、小さなビオトープを作り、鳥たちが休めるような水場になっている。

○活動で作られた農作物は、どこかで販売しているのか。

■三翠会では、農家さんから市場より少し高い値段でお米を買い上げ、私どもの気持ちに賛同していただける方に、タゲリ米として新米の時期に販売している。通信販売が基本だが、イベントなどで、茅ヶ崎でもお米を作っているんだよということをお伝えしながら、地元の方を中心にした販売活動も行っている。

(8) 湘南生物多様性研究会 (岸 しげみ 氏)

【自己紹介】

2011年発足で、インターネットの配信で、自然に関する番組をお送りしたりして、全国的にみんなで交流し、意見交換をするような活動をしていた。2015年からは、自分が調査、活動している湘南エリアにこだわって、いろいろな自然の変化などをまとめている。会員はそれぞれ、様々な会や学校などに所属し活動をしており、この会では、そうした活動のなかでわかったことを広く発信している。自分自身も、自然観察会や総合学習をする会や、谷戸の湿地の保全作業をする会に入っていて、3か所の湿地の保全を行っている。そうした活動の中でわかったことをまとめて、行政の環境フェアや神奈川県自然保護協会などのイベントで発表している。最終的には、もっと力をつけて、論文という形でまとめて残していきたい。

最近では、私が活動している谷戸で、たくさんあったヨシがオギに変わっていることがわかってきたので注視している。

【質疑応答】

○ヨシがオギに置き換わっているというのは、どのようなことが起こっているのか。

■どちらかというとおぎよりヨシの方が水辺を好むので、乾燥化が進んでいるのかもしれない。高茎の湿地は概ねヨシが多いが、少し水が少ないところにオギが入ってくる。藤沢の谷戸では、2020年にはヨシが大分生えていたが、2023年には、ほとんどの場所がヨシからオギに変わっていた。湘南の谷戸で、ここまで変わっているところがあるかどうかは、まだ調べていないが、いろいろな谷戸で活動している会があるので、気にしておいていただけたらと思う。いま問題となっているナラ枯れに関して、5年くらい前に、林のなかで樹液が増えているなと思っていたら、その後、ナラ枯れだったということが分かったということがあるので、ヨシとおぎの関係についても、他団体の皆様のところで、いろいろな変化があれば教えていただきたい。

他になければ、樹林について思ったことをお伝えしたい。樹林にもいろいろな役目があり、樹種により暗い林と明るい林がある。暗い林は、下にいろいろな植物が育たないので、生物多様性を豊かにしたいのであれば、明るい林がよい。明るい林は、二次林という人間が手を入れたところなので、それを維持するのが大事になる。いま茅ヶ崎全体で、林のなかに竹が増えている。竹が増えると林が暗くなるので、食べられるものは食べるなど、解決策を考えなくてはならない。竹の他に樹林を暗くする原因となるのが常緑樹林化である。そのまま放っておくと、暗くてしっかりとした100年の森だが、草地を残そうとするのなら、思い切って明るい林にした方がいいということをお頭の中に入れておいた方がよい。特に平太夫新田はコリドーとしての役割が大きく、川と草地と樹林の三つが残ることで、いろいろな生きものが行き来する渡り廊下のような役目を果たすので、草地性の植物を守ろうとするにはどうすればよいかということをお相談し考えたらよいと思う。

また、明るい林をつくる主役は、コナラやクヌギなどの落葉広葉樹だが、あまり大きくしてしまうと大変である。竹林は、傘を差して通れるという理想の形を保ちながら、適度にあるのはいいと思う。自然保護をしていると、木を切られると体が痛むような感覚があるかもしれないが、木は20年もすれば結構大木になるので、下がすごく暗くなってしまい、もっと早く切っておけばよかったということがあるので、参考にいただければと思う。

先ほど、森林環境譲与税の話があったが、財源の少ない茅ヶ崎市としては、そのお金があるうちに、切るべきものを切って林を明るくしておく、今後、長期間にわたって生物多様性を高められるのではないかと考える。

自然保護が難しい理由には、土地の所有者の力が強いからということがある。土地を確保しないことには、自然保護はなかなかできない。行谷の遊水地予定地は、もともと田んぼのあるところだったが、一部、盛土が入ってきた。たくさんのお金が入っている土地を公有地化する手段として、私は遊水地を勧めた。長期に維持することを考えることが大事で、今後も見守って、いろいろな提言をしていきたい。

(9) NPO法人 ゆい (荒井三七雄 氏)

【自己紹介】

昭和29年ごろに茅ヶ崎に移り住んできた当時、ハマボウフウという海浜植物が地元の方々に親しまれていた。20世紀の終わりごろになって、海岸に行ったとき、すでに絶えていると思っていたその植物を何株か見たのをきっかけに、何とかこの植物を残したいという思いが生まれ、浜辺を何とかしたいという思いに繋がってきた。ハマボウフウがどのような植物か調べるため、本で読んだり、薬用植物であることから、つくばの厚生労働省の薬用植物試験場を訪れたり、調査をするなかで、協賛する方が集まってくださり、2004年にゆいという組織を立ち上げた。海浜植物を何とか増やしたいということで、自然の種子を繁殖し、本来の土地に戻すという保全活動のほか、海浜植物がもつ防災機能の実証のため、海岸工学の埼玉大学と組んだ調査も行ってきた。

2013年から3年間は、茅ヶ崎市の協働推進事業として、茅ヶ崎海岸グランドプランに基づき海岸のみどりの保全と再生事業を実施した。その後、損保ジャパンの環境保全活動のプロジェクトに採用していただき、2017年までその活動を行った。

茅ヶ崎海岸グランドプランでは、漁港周辺地区の中央部に駐車場を整備し、西側を潜在自然植生帯、東側をイベントやスポーツの活動拠点とする計画だったが、予算がなく動きがないなかで、3年前にようやく市が動いて駐車場整備が行われた。駐車場の収益で西側の植生帯を回復させるという話になっていたはずだが、2021年12月に、この事業は茅ヶ崎市が実施するので、ゆいさんは関与しないで結構ですということになり、その後、私たちはタッチしていない。

現状では、保育園、小学校、高校、大学関係からの依頼を受け、出前講座や観察会、育てるための理科の勉強のお手伝いなどを行っている。最近では、お付き合いのある横浜の県立高校の同好会の研究が賞をとったという連絡があり、若い世代の動機づけになってくれて嬉しく思っている。

定例会は我々会員のみで行っているが、北海道の石狩市など、各地との交流があり、湘南地域にとどまらず、広い海岸線を調べたり、2010年には茅ヶ崎で全国大会を開いたこともある。

茅ヶ崎市や環境審議会には、毎年、ほぼ同じようなことをお話しているが、話を聞いていただくだけで、そのあとのフィードバックがない。私どもが申しあげている事柄について、突っ込んだやりとりをさせていただくと、私たちにとっても非常に勉強になるしためになる。ベクトルを揃えるという意味で、我々がどういう根拠で申しあげているかということを理解していただくことが大事だと思っている。

【質疑応答】

○以前実施していたような植栽などの活動からシフトして、現在では、環境教育の支援や、全国の団体等との連携的な活動が中心という状況なのか。

■直近では、自生種による飛砂防止の実験を湘南で行いたいという事業者がいて、藤沢土木事務所経由で、その業者と面談してもらえないかという依頼があり対応した。植栽の持つ防災機能については、自分も重視していたところなので、結構じゃないかということをし申し上げたところ、その実験が許可され、植栽関係はほとんど私どもで担当させていただいた。その話は、鎌倉市にも波及し、県会議員へ説明することにもなった。今後も、方向性が合致するのであれば、いろいろな団体さんに協力してもよいと思っている。実現には至らなかった

が、事業者からの新規事業の依頼もあった。広島工業大学からの協力依頼で、人口浜辺の植栽関係の技術について協力依頼があつて関わらせていただいたこともある。また、日本緑化センターの機関紙「グリーン・エージ」から執筆依頼があつて出させていただいたこともある。神奈川県公園協会賞の優秀賞に選ばれたこともある。賞をもらうことは目的ではないが、活動の成果ではないかと思っている。

○柳島付近でビロードテンツキを見かけたが、そうした茅ヶ崎海岸の植栽には関わられているのか。

■それは他グループで行ったものだが、一通りの植物のお手伝いは当会で行った。これは、私からのお願いだが、毎年こういう場で問題提起しても何も反応がないが、審議会の方で、行政との意思疎通が図れるようにしてほしい。海岸は私たちの土地ではないので、行政の方から関与しないでくれと言われると動けない。以前の環境基本計画の年次報告書で、我々の活動について問題があるようなことが答申で書かれたことがあるが、去年の12月に参加した日本植物園協会のフォーラムでの話では、何ら問題がないということであった。いろんなデータを見ながら、市民、行政、学者の皆さん、みんなで認識を深めることが大事なのではないかと思うので、そうした場が欲しいというのが願いである。

2 その他

→事務局より次回会議の案内を行った。

【第3回自然環境分科会】

日 時 令和5年8月10日（木）14時から

場 所 市役所分庁舎5階 特別会議室（WEB会議）

■配布資料

茅ヶ崎市環境審議会第2回自然環境分科会（WEB会議）自然環境団体ヒアリング